



タンチョウ博士のお話（第25回）

○長沼のタンチョウが、私たちに示していることは？

長沼周辺の大湿地にたくさんいたタンチョウが姿を消して、100年以上経ちました。そして去年、昔に比べると「猫の額」の広さといえる舞鶴遊水地で、ひと組の夫婦が無事に1羽の子を育てました。

長沼の周りからタンチョウが消えたのは、ヒトが湿原を干拓し、住む場所をなくしたからです。ヒトも食べ物がないと生きられません。陸上の天然の食べ物だけでは、大勢のヒトの胃をとてみ満たせません。そこで、食物をつくる環境が必要となり、その環境を作る能力をヒトは進化させてきました。

しかし、ほとんどの動物は、食物を作る環境も、そこで自ら餌を作ることもできません。自然にある環境と、自然にある餌で命を保ちます。そうした環境の残る道東で、タンチョウはなんとか生き延びてきました。

そのうえ、タンチョウはめでたい生きものとされ、飼育や食材に使う経済動物として本州へ輸出されました。従って、タンチョウにとりヒトはまさに天敵であり、ヒトから逃げる必要でした。

しかし、前世紀半ばから、タンチョウは生き方を大きく変え始めています。

その一つが、人慣れです。餌でおびき寄せて、一網打尽を狙うのが「天敵」のやり方です。が、どういうわけか、ヒトは餌を撒いて、その後の一網打尽を行いません。やがて、タンチョウは、ヒトが危害を加えず餌をくれる動物で、ヒトのそばへ寄っても大丈夫だと学習しました。そして、ヒトと同じく、親の振舞いは子へと伝わります。

二つめが、繁殖環境の変化です。広々と開けた湿地に巣を造るタンチョウのイメージとは裏腹に、例えば釧路では、今や約4割の巣が林の中や森に囲まれたところにあります。さらに、畑や舗装道路の脇、さらには農家の庭先と言えるところに巣を造る夫婦もいます。

こうした変化を基にして、三つめが、道東からの分散です。再発見されてから80年近く経ち、やっと道北や道央へ進出し始めました。これは、大いに歓迎すべきことです。なぜなら、道東での2密（密集・密接）の解消が少しずつ進み、ウイルス（毒性の強い鳥インフルエンザなど）による絶滅が、ある程度避けられる兆しが見えてきたからです。

こうして、周りの状況に応じ、タンチョウはしだいに生き方を変えて命を保っています。コロナ禍や文明の発達と共に、ヒトも生き方を変えざるを得ない生きものであることを、改めて納得させられています。この想いを引き出してくれた舞鶴遊水地の繁殖した家族は、どうやら日高地方で冬を過ごしているようです。春になって、その家族が再び長沼へ無事戻ることを、心から願っています。（文：正富宏之）



図1. わざわざ車の前へきて、飛び立とうとしている家族（人慣れの例。左オス・中メス・右幼鳥）2020年9月30日舞鶴遊水地

（撮影：正富宏之）